

熱帯林を食べる？

赤嶺 淳

食生活誌学・サブライエーション研究

『バナナと日本人』（一九八二）の著者・鶴見良行さんの薫陶をうけ、東南アジア研究を志したのが、一九八〇年代後半のこと。食材の生産から消費をつな

ぎ、その連鎖に介入する歴史の絡みあいを、わかりやすく整理してみせる鶴見さんの手法に魅せられ、現在にいたっている。

九〇年代初頭、鶴見さんは、「ヤシ研究会」という共同研究を組織した。マレーシアとインドネシアで急増中のアブラヤシと農地改革の渦中にあつたフィリピンのココヤシに着目し、油脂研究を構想したわけだ（鬼籍に入られたため、鶴見さんの油脂論は未完）。

それから二五年。俄然、油脂が気になる存在になってきた。「食と環境」研究にとつて、高度成長期に増大した畜肉と油脂の消費が気になるからだ。

この背景には、国策として推進された栄養改善運動がある。同運動は、システムキッチンの普及にともなう燃料革命、コード Cheney の浸透とともに躍進したスーパーの全国展開と一蓮托生であつた。

竈からガスコンロへの転換、煮物や焼物から揚物への嗜好の変化、食の簡便化などを特徴とする現代の食生活は、地域社会や地球環境にどのような影響をあたえているのだろうか？

油脂でいえば、熱帯雨林の保全はもちろんのこと、アブラヤシ園の造成によって住処を追われるオランウータンの保護が急務の課題とされている。

しかし、わたし自身の生活がパーム油の恩恵に浴している以上、正義／不正義の線を引くのはむずかしい。

だからこそ、開発の現場とわたしの食生活の実際とを往還しながら、油脂の生産と消費をつなぎ、地域と地球の未来を構想する仕事を残していきたい。

書きたいテーマ・出したい本

「現代歴史学」の文脈から民衆と暴力の問題を考察

須田 努
日本近世近代史

かつて、「戦後歴史学」は先験的に指定されたバラ色の未来、それに繋がるための歴史を語ってきた。冷戦構造が終結し、言語論的転回を経験した以降の「現代歴史学」は、現代を相対化するために存在している。わたしたちは、過去において誤った選択をしたのではないか、という問いかけも行い、そこから、多様な将来の方向性を探るわけである。

三〇（五九）と三遊亭円朝（一八三九〜一九〇〇）という、身分・社会的立場が異なる二人を通じて、既存の政治体制が崩壊した一九世紀の社会には、暴力が満ちあふれていたことを再確認できた。また、身分解放令後も旧来的身分差別は根強くこの都市の最下層民に対する冷たい眼差しとからみあい、近代的な差別の習俗が形成され、それを当時の社会や民衆が受け入れてしまったことも提起できた。

2017年、わたしは『吉田松陰の時代』（岩波書店）と『三遊亭円朝の時代』（有志舎）を上梓した。この二冊の個人史で試みた方法論は、上記の問題意識を前提に、主体を agent として理解し、その転変を時代の中に位置づけるということ、伝記や文芸作品を歴史史料として用い、実証研究を行うということであった。吉田松陰（一八

日本社会における非寛容な風潮、排他主義、DVといったことに向き合う必要性を感じ、日本近世史・近代史、朝鮮近代史、台湾近代・現代史、ベトナム近代史、家族社会学、といった専門家からなる「民衆暴力と社会変容」という共同研究を立ち上げた。アジアをフィールドとして、民衆と暴力の問題を「現代歴史学」の文脈から考察し、よりよい未来への展望をも見出してみたい。